



避難住民に謝罪する東京電力の幹部。原発は「夢のエネルギーで、圧倒的に安価なエネルギー源」という神話は崩れた

日本は日清、日露の戦争で勝利し、アジアの強国となり、ヨーロッパ並みの植民地を有する帝国となった。それは国民の力を結束させるナショナリズムの力によるものであり、戦勝と帝国の建設はナショナリズムを満足させた。ナショナリズムが悪いとは思わない。日清、日露の戦争に勝てたのはナショナリズムのあつた

植民地は持ち出した

の原発を造らなければ技術は進歩しない。同じものを造るのは、それによって安くできるからだ。しかし、原発は夢のエネルギーではなく、圧倒的に安価なエネルギー源でもなかったようだ。もし原発の発電コストが本当に安いのなら、もっと技術開発におカネを使って、安全コストをかけてもよかったのではないか。

原子力は火力より安いとされてきたが、そうではないようだ。電気事業連合会の「原子力発電四季報」(第26号、2004年3月)によると、1キロワットのコストは原子力5.3円、LNG(液化天然ガス)6.2円とそれほど大きな差ではない。このコスト比較に対して、批判は少ないとされ、廃炉や使用済み核燃料の処理コスト、原発立地促進のために地元自治

体は、多額の税金を投入は一時で、直ちに減少していくという制度を作った。多額の税金を継続的に得るためには、次々と原発を造らせるしかない。多くの原発立地に何号機もあるのは、そういう仕組みがあるからだ。一つ造ればいくつも造れるという仕組みができて、原発は日本に54機もできた。

原発の建設は、日本もこの莫大な力を持ちたいというナショナリズムの発露であつたと思われる。核武装の選択も視野に入っていたのかもしれない。それにしても、福島原発だけで広島型原発の数千個分の核物質があるということだから、54基も建設する必要はなかった。

また、原子力利用技術を進展させたいというのなら、同じものを造っているのは駄目である。新しいアイデアを入れて別の原発を造らなければ技術は進歩しない。同じものを造るのは、それによって安くできるからだ。しかし、原発は夢のエネルギーではなく、圧倒的に安価なエネルギー源でもなかったようだ。もし原発の発電コストが本当に安いのなら、もっと技術開発におカネを使って、安全コストをかけてもよかったのではないか。

体に支払う交付金のほか、送電費用、出力の調整ができないために必要となる揚水発電コスト、規制官庁のコスト、なども考慮していないという。もちろん、事故処理のコストを含めればそうとうに高くなる。しかし、事故を考慮しなくても、原発のコストは、火力と同レベルか、実は高かったのではないか。私たちは、使用済み核燃料という不良債権を積み上げながら安い電力を使っていたことになる。原子力発電所は植民地とよく似ている。始まったのはナショナリズムのゆえだった。しかし、それが利権となつていく。低いコストで多くの利益が得られるがゆえの利権ではない。より多くの経費がかかるがゆえに、より多くのおカネがバラまかれる。それに多くの人が群がるがゆえに利権となるという構図である。日本全体では少しも利益がないのに、特定の人々には利益がある。その利益を守ることによって、日本全体の利益がないがしろにされていく。ナショナリズムが利権になると、国家は危うくなる。



はらだ・ゆたか ●1950年生まれ。東京大学農学部卒業。経済企画庁国民生活調査課長、海外調査課長などを歴任。

THE COMPASS

【コンパス】

ナショナリズムによる負の遺産

国家の利益を毀損する「原子力」という利権

●大和総研顧問・東京財団上席研究員

原田 泰

少年雑誌がこうであれば、ヒロシマ、ナガサキの惨禍から二度と戦争はしないと同時、これほどの巨大な力を日本も持つ必要があると思った人も多かったのではないだろうか。52年に連載が開始された『鉄腕アトム』は、10万馬力の原子力の力で、人々を守るロボットである。原発は、日本人が、原子力という莫大なエネルギー源を管理できることを示すという、ナショナリス

原発もナショナリズム

ん少の少し昔のことでも、それがどんな時代だったかを思い起こすのは難しい。ヒロシマとナガサキの惨禍を経験した日本が、なぜ原発大国といわれるほどに原子力発電所を建設するようになったのか。子ども時代のことを思い出すと、1950年代の終わり、少年雑誌でよく戦争物語が特集されていた。戦争が悲惨というものでも、英雄的というものでもない。ミッドウェー海戦において、南雲忠一中将が航空機の出撃命令を出すのが遅れたがゆえに、赤城、加賀、蒼龍、飛龍の4空母を失うという大敗を招き、太平洋戦争での敗北を決定的にしたという記事を読んだことを覚えている。教訓は、「戦争をしてはならない」ではなくて、戦争での瞬時の判断と海戦における航空機の重要性、すなわち、新しい技術の重要性を認識することだった。

ムの発露だつたのではないだろうか。54年には中曽根康弘元首相らにより原子力研究開発予算が国会に提出された。その後、法律、制度、開発体制などの整備が進んで、63年には試験炉での発電が行われ、65年には初の商業用原子炉が運転された。

子ども時代のことを思い出すと、19